

2011.12.8
vol.15

『誓いの休暇』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

シネマ・ド・りぶら in りぶらまつり 2011 報告

1) シネマ・サロン「映画について話しましょう！」

11月12日(土) 10:30~12:00 会議室 103

来場者10数名。4名の根っからの映画ファンが来場され、プロモーションDVDを見ながらの映画談議を楽しむことが出来た。この方たちには芳名帳にご記入いただいたので、今後上映会の案内等を通じて交流を図っていく。また、展示物としてシネマ・ド・りぶらのこれまでの活動の資料化が出来た。

2名の熱心なボランティアさんには茶菓の準備と供応に頑張っていた。同時に上記映画談議にも参加して楽しんでいただいた。シネマ・ド・りぶらのスタッフの方たちが夫々の持ち場に掛りきりで、このサロンには参加できなかったのは残念。

2) 「ローマの休日」上映会

11月13日(日) 15:00~17:00 りぶらホール

入場者数 約 120名。混雑を心配して、受付を従来の正規入口から後部入口に変更したことが裏目に出て、予想外の不入りだった。上映作品は申し分なく、ホール内の準備や映写準備・映写ともスムーズだっただけに残念。

今回のような、りぶらまつりの一部として「上映会」を組み込む場合、もう少し工夫が必要だった。



「反戦映画」というより「青春映画」

私の生年に制作されたこの映画をのことを、何で知ったのかよく思い出せないのだけれど、Googleで検索すれば、たいがいの情報は手に入る。あとは、図書館で借りて観て、上映に足る作品かどうかを決める。

1959年、ハリウッドでは「ベン・ハー」がアカデミー賞で史上最多11部門受賞を果たし、キング・ヴィダーが「ソロモンとシバの女王」を監督して、史劇が多数作られた。フランスでは「カイエ・デュ・シネマ」誌で映画批評を書いていた若い作家たちが監督になり、フランソワ・トリュフォーの「大人は判ってくれない」、ジャン・リュック・ゴダールの「勝手にしやがれ」、クロード・シャブロルの「いとこ同志」が制作された。そして、ソ連では、「人間の運命」という大傑作が発表されている。それらに比べると、「誓いの休暇」は小粒な作品だ。しかし、「珠玉の」ともいえる作品だと思う。しかも「珠玉の反戦映画」ではなく、「珠玉の青春映画」。

ロシア映画を検索していたら、「ロシア映画社」のホームページを見つけた：<http://russiaeigasha.fc2web.com/>。「ロシア映画の過去・現在・未来を紹介する日本で唯一のサイト！」らしい。「ロシア映画資料室」では、50音別にタイトルが検索できる。むかしTVで観たロシア版の「戦争と平和」をもう一度みたいと思ったが、なんと7時間に及ぶ超大作だった。TVのは、235分の総集篇だったのかもしれない。もちろん、オードリー・ヘプバーン、ヘンリー・フォンダ、メル・フェラーのアメリカ版も観ているが、「戦争と平和」のリュドミーラ・サヴェーリエワは、「ローマの休日」のオードリーに匹敵する。

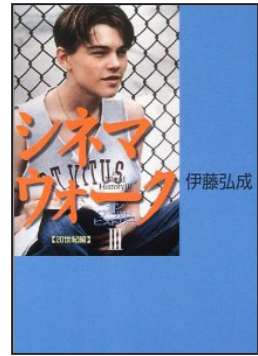
最近、トム・ロブ・スミスのレオ・デミドフ三連作(チャイルド44)を読んだ。1933年から1980年に至るレオとソ連の歴史。妻のライーサが、そのままリュドミーラ・サヴェーリエワにはまる。 e3

『誓いの休暇』 フィルムデータ

原題 : BALLADA O SOLDATE
BALLAD OF A SOLDIER
製作年 : 1959年
制作国 : ソ連
上映時間 : 88分 モノクロ

監督 : グリゴリー・チュフライ
脚本 : フレンチン・エジョフ、グリゴリー・チュフライ
音楽 : ミハイル・ジープ
出演 : ウラジミール・イワショフ、ジャンナ・プロホレンコ
アントニーナ・マクシーモワ

りぶらサポータープロジェクト 「シネマ・ド・りぶら」 『誓いの休暇』 関連図書案内



映画で世界を読む

N 778.0 伊藤 弘成 山川出版社
『シネマウォーク インワールドヒストリー 1 通史編』

映画に描かれた史実から世界史を学習するガイドブック。「トロイ」「ブラザーフッド」など新作を25本追加、旧作22本の内容も全面改訂し、史実に忠実で、内容・映像的に「時代」を正確に観せる作品47本を厳選して紹介。

N 778.0 伊藤 弘成 山川出版社
『シネマウォーク インワールドヒストリー 3 20世紀編』

映画に描かれた史実から世界史を学習するガイドブック。「アンジェラの灰」「戯夢人生」「13 デイズ」「ノーマンズ・ランド」など47本の映画から、20世紀の消された世界史を知る。

N 778.0 山田 和夫 新日本出版社
『映画で世界を読む』

ピアニストはなぜ船を降りなかったか？(海の上のピアニスト)、シェイクスピアが恋におちたのは？(恋におちたシェイクスピア)など思いを巡らせ、新しい発見の楽しみ、面白さを紹介する。

N 778.0 磯野 テツ 彩流社
『映画なんでもランキング』

「映画狂(シネフィル)」とはひと味違う、独断と偏見と「映画愛」に充ちた笑撃の映画ランキング。きまじめなランキングに、おふざけもある、映画という魔法にとり憑かれたふたりの男からの、映画という王への捧げ物。

N 778.2 福井 次郎 彩流社
『「戦争映画」が教えてくれる現代史の読み方』

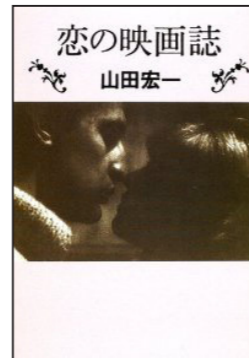
ナチによるホロコーストからパレスチナ問題まで、こみいった歴史も映画を観れば驚くほどよくわかる。450本以上の作品を現代史の流れに対応させて紹介。



戦争と恋・家族

N 778.2 山田 宏一 新書館
『恋の映画誌』

1995年10月~96年9月まで『毎日新聞』日曜版に、「ラブシーンのときめき」の題で連載されたものをもとにまとめる。恋のシーンを映画史的に旅して自らの魂の冒険を試み、映画を映画的に、映画の言葉で語る。



N 778.2 奥田 継夫 ポプラ社
『映画で考える学校・家』

1巻では、学校・家庭を取り上げる。学校・家庭で悩みながら成長する10代。人生の先輩として、映画を紹介しながら、児童文学作家の体験をふまえ、友情、生活を語る映画論を超えた人生論。

『映画で考える青春・恋』

2巻では、青春・恋・性を取り上げる。民族・国を越えて、若者に共通の問題について、様々な角度・方法で迫り続けてきた映画の紹介を通じて、まっすぐ、あたたかく語りかける。

『映画で考える戦争』

3巻では、戦争を取り上げる。戦争がない日本だが、世界には戦争にまきこまれている子供もいる。映画から戦争の本当の姿、カラクリを説き明かし、疎開体験をベースに、ほんとうの戦争の恐ろしさを語る。

現代の監督

N 778.2 みや こうせい 未知谷
『アレクサンドル・ソクーロフ』

次々と問題作を撮り、ロシアのみならず、世界でも最も注目される映画監督のひとりで、21世紀の知の巨人とも称されるアレクサンドル・ソクーロフの等身大をとらえた写真集。写真家は彼と厚い信頼で結ばれているみやこうせい。

N 778 アンドレイ・タルコフスキイ 水声社
『タルコフスキイの映画術』

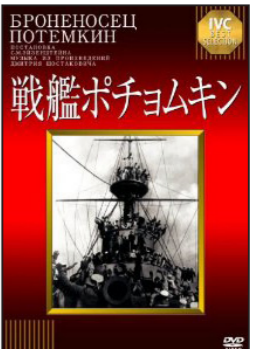
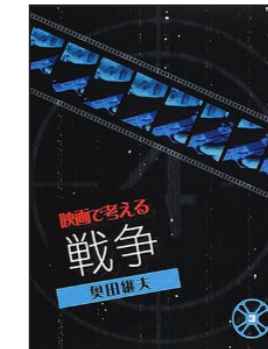
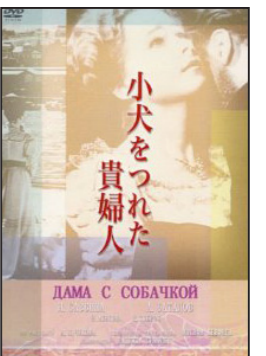
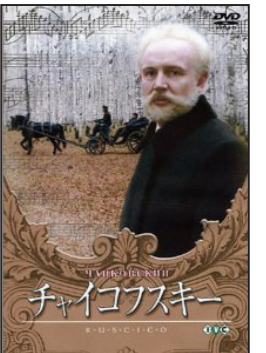
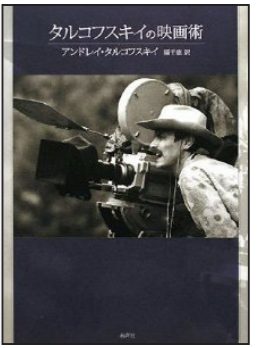
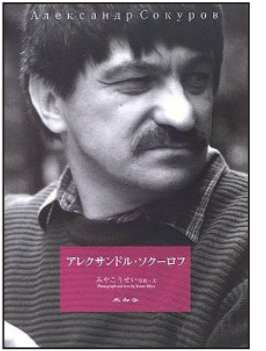
世紀を、国家を超えていまなお観客の魂を魅了する映像作家、タルコフスキイ。映画に対する情熱から、作劇、演出の実際にいたるまで、現在に遺されたソ連時代の肉声を集成し、「映像詩人」の原点に迫る映画論集。

ロシア映画 DVD

778.2 『チャイコフスキー』
イーゴリ・タランキン
アイ・ヴィー・シー

778.2 『小犬をつれた貴婦人』
イオシフ・ヘイフィッツ
アイ・ヴィー・シー

778.2 『戦艦ポチョムキン』
セルゲイ・エイゼンシュテイン
アイ・ヴィー・シー



誓いの休暇

この映画の冒頭の、村はずれの曲がりくねった道で、息子の戦場からの帰還を待つ母親のシーンが、この物語の結末を暗示している。期せずして、ロシアの英雄になった若者が望んだ褒賞は、故郷に残した母親に会い、傷んだ屋根を直すことであった。そして将軍が若者に与えたのは、6日間の休暇であった。

戦場から故郷へ、広大なロシアの大地を突き進む機関車を前面から見上げるアングルの映像や、林や荒れ地が窓の外を通り過ぎるシーンは、若者を一時も早く母親のもとへ帰らせたいと願う観客の心理を誘う。他人のために貴重な時間を使い尽くしたまじめな若者の6日間は、彼の一生に値する。そして、若者には母親とのいつきの時間が残ったのみであった。

戦争が無ければ、この若者の人生はどんな一生を過ごしたのだろうか…。1959年制作にされたこの作品は、1960年カンヌ国際映画祭グランプリを受賞した。 au

反戦と青春の物語

ファーストシーンに驚いた。ナチスドイツがロシアに進出してきて苦戦している最中、前線にいたアリョーシャは敵の戦車に追われながら、たまたま置き去りにされていた対戦車砲を手に取り、眼前に迫る戦車に狙いを定め、2台の戦車が火を噴く。これは戦争映画かと思われたが、物語はここから始まった。

この戦功にて、アリョーシャは褒美をもらえる事になり、「母に会いたい、屋根が傷んでいると手紙が来たのです」と言い、6日間の休暇を特別に許可してもらった。家に帰るのに2日、隊に帰るのに2日、屋根の修理に2日が必要だった。

帰郷が認められたアリョーシャは、心弾ませ帰途につく。帰郷の途中で、アリョーシャは色々なことに出会う。一人の兵士から預かった2個の石鱈、片足のない復員兵士、貨車の中で出会う少女シューラとの淡い恋心、乗車中の列車に突然の爆撃など、次々に事件と出会いが発生する。心優しいアリョーシャは、それぞれに誠実に取り組む。

時間がない中でやっと母に会えた。母の目に涙が溢れ、「家に入ってゆっくりして」「駄目なんだ急ぐんだよ」と車に乗り、「帰ってくるからね!」と叫ぶ。母は車が見えなくなるまでその場に立ち尽くし、戦争が終わっても、アリョーシャは母親の元に返っては来なかった。

困っている人を放っておけないアリョーシャは、貴重な休暇をほとんど人助けに費やしてしまい、目的の母親に会えたのはほんの一瞬。だけど「誓い」の休暇は果たした。観ている自分も、「早く早く」と感情移入していた。アリョーシャが泣きながら母親に手を振るシーンでは熱いものが込み上げ、改めて戦争を憎いものと感じた。 S.M

玉虫色の反戦映画

ソ連時代の戦争映画の中でひととき異彩を放ち、永遠の名作と言われるこの作品、1960年の日本公開の際はあまり話題にはならなかったのか、私はその存在すら全く知りませんでした。最近「りぶら」の仲間から薦められて、DVDで初めてこの作品を観て、忽ちファンになってしまいました。

第2次大戦の独ソ戦のさなか、偶然、最前線から故郷へ旅することになった1人の愛すべき少年兵の、6日間の記録を淡々とつづったこの作品。前線の兵士から妻への贈り物を託されたり、片足を失い妻に会うのをためらう帰還兵を励ましたり、汽車の中で可憐な少女に出会ったり。この6日間の旅で、大人への切符を1枚1枚手に入れていく彼を、暖かく抱き留めるロシアの心温まる人たちと大地。

数々のエピソードの中で、とりわけ「若い兵士と少女の微笑ましい出逢いと道行き、そして永遠の別れ」、「息子の帰還を聞き、畑の中を一心不乱に走る母、ほんの一瞬の抱擁しか許されず、涙で息子のトラックが遠ざかるのを見送るしかなかった母の姿」の二つの別れがとても切ない。この戦争さえなければ…、という思いに胸を締め付けられました。穏やかだが、実に巧みな反戦メッセージだと思いました。

が同時に、ソ連時代のロシアで、よくぞこのような反戦映画が出来たものだと思議になり、少し調べてみました。この映画が製作された1959年は、1956年のハンガリーの民衆暴動の武力鎮圧があり、世界中が核戦争の危機に震えた1962年のキューバ危機などから推察できるように、表面上は東西雪解け時代と言われながら、底流では東西関係が一触即発の状態にあった時代です。当然、映画は国家の監視下にあったはずで、予想通り、脚本の段階から党の芸術委員会から批判され、企画が難航したり撮影中も色々なアクシデントに見舞われていたようです。作品完成後も、党中央委員会から「反ソ的、反人民的で軍を批判している」と、チュフライ監督は党から除名され、映画も公開禁止となるなど、相当な逆風が吹き荒れたようです。

しかし、1ヶ月後にはどういうわけか委員会から許可が下りて(ソ連・各共和国の首都、大都市での公開が禁止という条件付き)農村部などで公開され、さらに委員会からの命令で、今度はカンヌ映画祭へ出品。1960年の「ユース賞(海外作品)」「ベスト・セレクション」を獲得という快挙を成し遂げることになるのです。

このような背景を頭に入れて、この作品をじっくり味わうと、この作品の隅々に、この作品を生き残らせるためのチュフライ監督の計算されつくした工夫を発見できます。皆さんも「りぶら」所蔵のDVDで、深読みして観られたら如何ですか。 K.M.